



各高の開拓者たち ～活躍する各高卒業生～

第08号 平成30年 7月5日(木)



★★平成8年度卒業生 小井土正亮さん(筑波大学卒)です。★★

名前：小井土 正亮

卒業：1997年3月

現職：筑波大学体育系助教

同蹴球部監督

「サッカーに始まり、サッカーに終わった高校生活」。そう表現しても差し支えないくらい、高校生活は部活動にエネルギーを注いでいた。それが現在の職業にもつながっていることを考えると、高校での3年間がその後の人生を決定づけたともいえる。

【高校生活】

1996年夏、山梨の地で各務原高校サッカー部史上初のインターハイベスト8進出。同年冬、憧れであった全国高校サッカー選手権大会に出場（初戦敗退）し、高校でのサッカー活動を終えた。顧問の林幹二先生（当時）のもと、来る日も来る日も練習に励み、気づいたら3年間が終わっていたという感覚であった。

中学生だった私は高校進学に際して悩んでいた。勉強をとるか、サッカーをとるか。サッカーの強豪校と呼ばれる私立や県外の高校へ進学し、自分の覚悟を決める選択肢もあった。しかし、逡巡した結果、勉強、サッカーの「どちらもする」ことを条件に高校を選んだ。こう記すとかっこ良さそうだが、当時は、サッカー選手だけを人生の目標とするのが怖かったこともあるし、自分に自信がなかったこともあったと思う。いずれにせよ、当時まだ全国大会に出場したことがなかった近隣の公立高校へ進学し、3年間もがいた結果、冒頭のような結果を出すことができた。それにはひとえに「仲間の存在」が大きかったと感じている。サッカーはいくらがんばっても一人では勝つことができないスポーツである。常にお互いが助け合い、厳しい言葉を掛け合い、時には愚痴もこぼしながら、でも、高めあってきた。3年生時



はキャプテンであったこともあり、個性の強い同級生のまとめ役、顧問との橋渡し役として悪戦苦闘したのも今となってはいい思い出である。他の思い出…がパッと出てこないくらい、脇目もふらずにサッカーに専念していたと改めて思う。一応、勉強もちゃんとしたことは添えておきたい。

【卒業後】

高校卒業後は、多くのご縁とサポートもあり、筑波大学に進学することができた。多くの選手、指導者を輩出している名門大学に進学することになり、ワクワクが止まらなかったのは入学してからの5月くらいまでである。その後は、周囲のレベルの高さ、ひるがえって自分の身の程知らずさ(=井の中の蛙)をまざまざと痛感することになり、自信



をなくした。苦しい時間を過ごした記憶が多く残っている。ただ、今となってはそれでよかったと思える。指導者になった現在、できない選手の気持ちがわかること、そういう選手が指導者に求めていることが痛いほどわかるだけに、自分自身がまさに自分では「できる」と思っていたのに「できない」選手であった経験が大いに役立っている。手を差し伸べるべきか、叱咤してやらせるべきか、はたまた何も声をかけずに見守るべきか、自身が苦しんだ者にしかできない配慮かな、とは思う。ただ同時に「もっと苦しめ。苦しんだ先にしかわからないものがある」という気持ちがあるのも事実である。指導に正解はないとつくづく考えさせられる日々だ。

【仕事】現在、筑波大学体育系で教鞭をとりながら、同蹴球部（筑波大学ではサッカー部のことをこのように呼称する）の監督をさせていただいている（写真1）。自らが楽しむことが主だったサッカーから、人を楽しませる、人を育てることが今の主の目的となっている。ここに至るまでにはさまざまな経験をすることができた。現職は2014年からであるが、それまでにプロ選手、コーチであったこともあれば、ヒモ状態（大学院生）であったこともある。Jリーグチームでのコーチ時代（写真2, 3）には、プロになりたての頃の岡崎慎司選手（現レスター）や、代表戦の歴代最多出場記録を持つ遠藤保仁選手（現ガンバ大阪）と一緒に仕事をすることもできた。そういった一流の選手たちと仕事をする中で、自分のできることと

できないこと、指導者の役割を学ぶことができた。結論から言うと、指導者ができることはかなり限られている、一流選手と二流選手では能力にはほぼ差はない、ということである。では、何が彼らを分けるのか。文字にすると当たり前のことではあるが、常にアンテナを張り、自分からアクションを起こし、反省を怠らない。とにかく自分を高めることへのこだわりが「半端ない」ことである。その一つの要素として両名とも「人の話を聞く」姿勢があった。自分にとってプラスになることであれば何でも吸収してやろう、という雰囲気は他の選手とは異質なものがあつた。岡崎選手は技術的には相当低い、遠藤選手は足が遅い、しかし誰もが認める一流選手である（なつていった）。その過程を間近で見ることができ、とても幸せな時間であつた。そのきっかけを与えていただいたのが、長谷川健太氏（現 FC 東京監督）である。院生時代にお手伝いした指導者ライセンスの講習会で知り合いとなり、その後、氏が監督になる際に声をかけていただいたからである。意思決定の返答までに2、3日しかなかった。そもそも大学の先輩でもある氏からのオファーに「NO」はあり得ないので、選択肢そのものはなかつたといえるが。ただ、チャンスはいつ、どのタイミングでやってくるかわからない。それ以来、私の座右の銘は「備えよ、常に」である。

【在校生の皆さんへ】

今できることは、「今を全力で生きる」ことしかない。私が高校を卒業した20年以上前（携帯電話が普及し始めた頃といえは少しはイメージが湧くでしょう）、今のような世の中になる（インターネット、スマホ、仮想通貨などなど）ことは誰も想像できなかった。これからの20年でどんな世の中になっているのかも…同様である。「将来〇〇に



なるために、今は××をがんばる」、一見、正しい論理のようだが、その〇〇がすでに世の中に存在しないかもしれない。「未来は不確定なのだから、何を準備しても無駄である」と、言いたいのではない。むしろまったく逆である。未来がどうなるかわからないからこそ「やり抜く力」「自分に嘘をつかない力」「心身の健康の保つ力」といったベーシックな生きる力を養っておくほかない。勉強、部活動、アルバイト何でもいい。自分自身を誇る何かをやりきって高校生活を終えてほしい。いつ、何がきっかけで、どうなるか、そんなことは誰にも、自分にもわからない。ただただ目の前のことを全力で、目の前の仲間を大切に、が今できることのすべてである。遠藤選手が言っていた、「明日やろうはバカやろう」だと。